

こころを 育む旅の かたち。

親子のほんもの体験で 子どもの「生きる力」を 育てる。

子どもの発達において、人間的にも学力的にも、伸びる基礎的な土台となるのは、小さなころの外遊びや身体を動かす遊び、豊かな「体験」の力だという。そんな教育学の理論に基づき、未就学児から小学生の親子を対象に、新しい家族の旅の楽しみ方を提案しているのが、JTB法人東京の「旅いく」だ。農業や自然体験、モノづくりや文化、鉄道を舞台にした職業体験——「社会に生きる力の芽」を育むプログラムで、新しい子育てのライフスタイルを提案している。

文●香田朝子
写真提供：株式会社ジェイティブィー・京浜急行電鉄株式会社



旅いくファーム「畑サイエンス★芋掘り」と生物の繋がり」



株式会社JTB法人東京
事業開発部 旅いく推進室 マネージャー

遊佐知広

Tomohiro YUSA



株式会社JTB法人東京
事業開発部 旅いく推進室 室長

大竹千広

Chihiro OTAKE

子どもたちの「生きる力」を育む

「旅育」という言葉をご存知だろうか。旅を通じて見聞や視野を広げ、子どもの人間的な成長を促す——子どもの「生きる力」を育む旅、それが旅育だ。

1996年、文部省（現・文部科学省）に設置された中央教育審議会は、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の第1次答申で、「これからの子どもたちにとって必要となるのは、変化の激しい社会を『生きる力』である」と提言した。「生きる力」とは「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」であり、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康や体力」だ。

この提言を受けて、2002年度以降、実施の学習指導要領は、子どもたちの「生きる力」の育成を理念に掲げている。11年から実施が開始されている新学習指導要領も、「子どもたちの現状を踏まえ、『生きる力』をより一層育む」ことを目指すとともに、「生きる力」の育成は、家庭や地域など社会全体で取り組むことが必要であるとしている。

こうした教育観を背景に広がっているのが、子どもたちの「生きる力」の育みに、「旅」を取り入れる旅育だ。親子が一緒にいろいろな体験を重ねることで、子どもの好奇心を引き出し、成長を促していく。新しい家族の旅のかたち、旅育が注目されている。

親子で体験する「旅いく」プログラム

JTBグループのJTB法人東京では、2010年6月に、未就学児と小学生以下の子どもを持つ家族向けにWEBサイトで「旅いく」を開設。「旅のチカラで子どもの生きる力を育てる」をコンセプトに、農業体験や職業体験などさまざまな親子体験プログラムを企画、WEBサイトで販売している。

社内新規事業として「旅いく」を立ち上げた事業開発部は、推進室の大竹千広室長は言う。

「社会環境の変化に伴って、子どもたちに関わるさまざまな問題が社会問題化しています。文部科学省も提唱していますが、私自身、子育てを通じて、いまの子どもたちに必要なのは、大きくなってからも社会で元気に自分らしく生きていける、『社会に生きる力』だと痛感しています。

旅はホンモノ体験の宝庫です。感性を育て、人を成長させる力がある。この旅の力を、子どもたちの未来に活かすことはでき

ないだろうか。「旅いく」の企画は、そんな思いからスタートしています」

人は、見たたり聞いたたり触れたりすること、外界からさまざまな情報を得、心身ともに成長していく。特に脳の発達の著しい幼少期から児童期にかけては、五感を使って多くの情報に触れることが、こころを豊かに、「生きる力」を育むことにつながっていくのだという。

親子体験プログラムの開発に際しては、お茶の水女子大学を中心とする大学チームと共同研究を進め、発達科学の知見から、旅や体験が子どもたちの成長にどのような効果をもたらすのか、旅や体験が育む「生きる力」の要素を体系化することから開始した。学術的な根拠に基づいたプログラムを開発するためだ。

「生きる力」って何だろうと考えてみると、それは知識や知恵であったり、健康や体力であったり、人を思いやる優しさや協調性だったり、いろいろな要素があることが分かります。

よく子どもは好奇心のかたまりと言いますが、小さな子どもの、すべての原点となっているのは「感じる力」です。感じることをベースに、発見する力やチャレンジする力が芽生えていく。あいさつをしたり、相手を思いやる力も、社会で生きていく大切な力です。

大学チームとの共同研究の結果、「生きる力」は「個人の力」と「チームの力」の総合力で、実社会で求められるコミュニケーション能力も、こうした力を備えることで磨かれていくことが分かりました」（大竹室

長）

体験を単なる体験で終わらせないために、「旅いく」では、大学チームとの共同研究に基づき、「生きる力」の要素——「生きる力の芽」を育む親子体験プログラムの開発に取り組んでいるという。

社会の仕組みを知る

「旅いく」で販売する親子体験プログラムの大きな柱は、農業体験と職業体験だ。

農業体験には、千葉県君津市に300坪の農地を借りて「旅いくファーム」を開園、「旅いく」オリジナルのプログラムを企画・実施できる環境を整えた。競技形式の野菜収穫体験や、収穫した野菜を使った調理体験など、子どもたちが主体的に取り組みたくなるプログラムづくりを心掛けていく。

「同じ野菜について学ぶにしても、外界から閉ざされた部屋で学ぶのと、外に出て実体験するのでは、その情報の質と量が全然違います。外に出て、実際に野菜を育ててみると、野菜の色や重さ、匂い、土の感触や太陽の光、気温の変化など、活字だけで学ぶことの何十倍、何百倍もの情報を感じ取ることが出来る。こうしたホンモノの五感体験がこころの成長につながっていくのです」（大竹室長）

12年の秋には、従来の農業体験プログラムをさらに発展させた「秋冬野菜の種まき・手入れ・収穫・販売」、全4日間の体験プログラムを大学チームと共同開発し、実施した。「旅いくファーム」を教室に、土や生き物、植物など自然環境を学び、種まき

から販売まで「職業としての農業」を体験することで、社会の仕組みを理解する。最終日には、東京・青山のファーマーズ・マーケットで収穫した野菜を販売し、農業という仕事やお金の役割を理解するとともに、「あいさつする力」や「人とながる力」の育成を目指した。

一方、職業体験については、自治体や地域と連携し、各地の素材を活かしたさまざまな体験プログラムを旅行商品化する地域版の「旅いく」で、キッズニアと職業体験プログラム「旅いく×アウトオブキッズニア」を共同開発している。

八ヶ岳周辺（山梨県および長野県）、尾瀬片品村（群馬県）、墨田区（東京都）で実施しているもので、地域の特性を活かして発展した産業や地域に伝わる伝統の技、時代とともに新たに生まれたモノづくりを、子どもたちに体験させている。

八ヶ岳周辺ではこれまでに、八ヶ岳の名水を使ったそばづくりや和菓子づくりなど

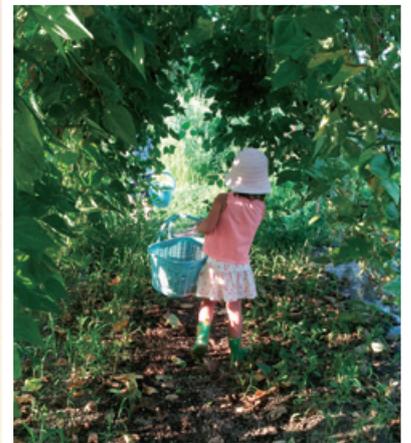




八ヶ岳「ご当地グルメのお仕事★そばを作ろう」



八ヶ岳「ご当地グルメのお仕事★清里バーガー作り」



尾瀬片品村「こだわり農家に弟子入り★夏野菜を収穫しよう」



墨田区「匠革職人の仕事★『メイドインすみだ』のオリジナルペンケースを作ろう」



墨田区「時計職人の仕事★腕時計を作ろう」

ご当地グルメを楽しむ料理体験や、キャンプ、夜空の星を楽しむ自然体験のプログラムを実施。尾瀬片品村では高原トウモロコシの収穫体験や昆虫採集などを通じて、自然の中の生活の知恵・工夫を学ぶプログラムを展開している。

日本の伝統工芸の工房が数多く存在する墨田区で行っているのは、屏風や江戸切子、和紙、時計や板金加工などの職人体験だ。モノづくりの難しさや職人のこだわり、日本の伝統文化や技術力の高さを学ぶプログラムを、通年で企画し展開することが決まっている。

人気が高い鉄道体験プログラム

鉄道会社との共同企画による職業体験プログラムも実施している。

「旅いく」開設時から販売する小湊鉄道での「見習い車掌体験」がその第一弾で、参加した子どもたちは千葉県市原市・五井駅から上総中野駅まで見習い車掌として乗務する。

「子どもにも人気が高く、身近な鉄道の職業体験を通じて、ホンモノ体験の宝庫である旅を好きになるきっかけづくりを提供しようと考えた夏休み企画です。これが大変な人気で、毎年実施するようになりました」と、事業開発部旅行く推進室の遊佐知広マネージャーは話す。

「首都圏の鉄道会社と異なり、小湊鉄道は大半が無人駅で、車掌は駅員の仕事も兼ねています。昔ながらの紙の切符を車内で販売し、乗降客にあいさつをする。子どもたちは車掌体験を通して、地域に貢献する鉄道の素晴らしいことや役割、人との触れ合いの大切さを学びます」（遊佐マネージャー）

翌11年から実施しているのが、大井川鐵道での「SL乗車体験」だ。車両区整備工場前で出発前の整備・点検を見学し、SLに乗車してお弁当を食べながら約1時間のSLの旅を楽しむ。出発駅に戻ってからは、制服に着替え、昔ながらの硬券切符にハサミを入れる駅員体験をする。

「SLに乗るということだけでも非常に面白い体験になるのでしようが、出発前の整

備・点検の見学を組み入れ、SLを走らせるためには出発の何時間も前から整備しなればならないのだということ、専門の技術や特別な道具が必要なのだということを、理解できるようにしました。

大井川鐵道は37年前からSLを動態保存し、毎日運行しています。古いものを大切にすること、愛情を込めて整備するということが、いまの私たちの生活は、ものを長く使うということがなくなりました。古いものを使い続ける、直しながら使うということは決してかっこ悪いことではなく、本当は大事なことなのだということを、子どもたちに分かってもらいたいと思っています」（遊佐マネージャー）

もちろん、整備士や運転士、車掌など、鉄道に携わる人たちのチームワークと努力が安全運行を支えていることも、子どもたちに伝えたい大切なポイントだ。チームワークの力の育みにつながっていく。

一方、同じく11年から実施している京浜急行電鉄との共同企画には、「駅係員体験」がある。2年目を迎えた12年には、京急沿



小湊鉄道「見習い車掌体験」

線をフィールドに三浦半島ならではの職業体験や京急グループの施設でのキッズプログラムイベントを主催する「京急キッズくらぶ」とコラボし、「旅いく×京急キッズくらぶ2012年夏休み編」として、3プログラムを実施した。

人気の高い鉄道職業体験は、「1日駅係員になろう」で、首都圏大動脈の役割を果たす京急久里浜駅管轄区で1日駅係員を体験する。

三浦半島を舞台にしたプログラムは、油壺マリパーク周辺で磯や川の生き物を観察し、家に持ち帰って自分で飼育できるように見習い飼育員として飼育方法を学ぶ「三浦のメダカを育てよう」、人気の水中観光船「にじろさかな号」の乗船員として乗船客に海の素晴らしさや大切さを伝える「三浦半島の海の魚を案内しよう」の二つを実施した。

「京急電鉄さんも単なる観光体験ではない、もっと子どもたちのためになる取り組みを展開したいというお考えがあり、『旅いく』とのコラボが実現しました。三浦半島という地域に貢献するCSRとしても、価値ある取り組みだと考えています」（大竹室長）

ホンモノのメッセージを伝える

「旅いく」の体験プログラムの特徴は「ホンモノを体験させる」ことにある。

「ホンモノの場所」で、その道のプロの方々と一緒に『ホンモノの体験』をする。とで、子どもたちに、例えば自然の大切さや文化の大切さ、モノづくりの知恵や技術、働くということなど、人が生きる上で本当に大切な『メッセージ』に気づいてもらうことを目指しています」（遊佐マネージャー）

子どもたちに何を感じてほしいのか——すべてのプログラムづくりは、その問いかけからスタートする。職業体験プログラムなら、協力企業とディスカッションを重ねる中で、その企業ならではのメッセージ、

その企業でしか感じられないことを引き出し、体験プログラムを組み立てていく。逆に企業側が「できる」と申し出たことでも、「旅いく」のプログラムにそぐわないと判断したときには「お断りすることもある」（遊佐マネージャー）

「旅いく」では、こうして「ホンモノ体験」にこだわった親子体験プログラムを四つのテーマに分類、サイト上で販売している。「モノをつくる」「街ではたらく」「自然に学ぶ」「文化に親しむ」の四つで、プログラム内容に応じて3歳以上、5歳以上、小学生以上のコースを設定している。

2012年12月末現在、「旅いく」サイトの会員数（メルマガ購読者数）は約1万7800人。関東在住の会員が約半数を占め、年齢層では30〜40代が過半数を占める。これまでに100プログラムの親子体験プログラムを開発し、4000人以上の親子が参加した。

「子どもたちの『生きる力の芽』は、小さいころから親子でいろいろな体験を重ねることで育まれていきます。子どもと一緒に外に出て、ホンモノに触れる機会をたくさん持つことが、子どもの成長につながる子育てなのだということを、『旅いく』を通して発信していきたいと思っています」（大竹



京浜急行電鉄「おうちで飼育員★三浦のメダカを育てよう」



京浜急行電鉄「京急電鉄でお仕事★1日駅係員になろう」

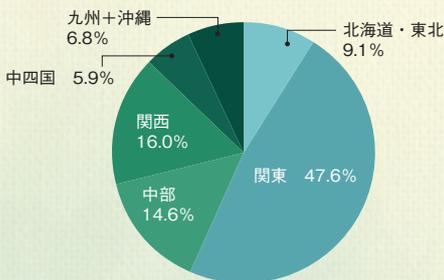
室長）

そのためには、体験プログラムのラインアップ強化が課題と考えている。旅先としての魅力も大きい地方鉄道や、地域のイベントとからめたプログラムなどが候補に挙がる。

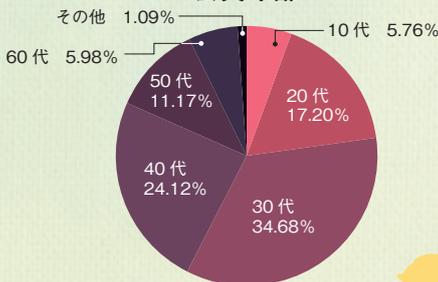
また、近年、観光活性化を図るため、地域が第3種旅行業を登録し、着地型ツアーの企画・販売を行うケースが増えている。

「これまでに培ったノウハウを用いて、地域の魅力ある素材を生かした体験プログラムを、地域とともに開発し、活性化に貢献していきたいと考えています。子どもたちの成長

会員の地域分布



会員年齢



につながる場所として、他の着地型ツアーとの差別化を図り、家族旅行の需要を喚起していきたいと思えます」（大竹室長）

子どもたちの未来のために——「旅いく」では、次世代の人材育成に関心の高い企業、地域や行政等からの賛同を広く促し、子どもたちの成長を支援する取り組みをさらに広げていく方針だ。